# 【涼宮ハルヒ二次ＳＳ】「ある雨降る日のこと」～長門の話～

丸猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【涼宮ハルヒ二次ＳＳ】「ある雨降る日のこと」～長門の話～

【Ｎコード】
Ｎ２３９０Ｉ

【作者名】
丸猫

【あらすじ】
それはいつものＳＯＳ団の日常だった。平穏は時間を大声で一蹴し、俺があちらこちらへと奔走し、疲れ果てるような日常。だが、それは俺の物語でしかない。つまりは、俺の知らないところでハルヒや長門の物語があるわけで、たまにはそれも知ってみたいと思うのは俺だけではないだろう。
これは俺が寒空の下、雑用係の仕事をこなした秋の終わりの、長門の話だ。

## （前書き）

前書き（諸注意）

この小説を閲覧される場合は以下の点にご注意ください。
第一点目として、タイトルにもあるようにこれは二次創作となっています。二次が苦手な方や原作への思い入れが強い方は閲覧されないことを推奨します。
第二に、これはキョン視点の原作と異なり、長門の視点で物語が展開されます。可能性として、読者のみなさんが持つ長門有希のイメージを崩すなど、不快感を与えてしまうかもしれます。
そして第三に、これは２０１０年春公開の「涼宮ハルヒの消失」につながる話です。一部、ネタばれとなっている点もあります。
閲覧の際は、これらの点をご了承の上でお願い致します。

……。

私は手の上で広がる活字の世界から目をそらさず雨の音を聞いていた。雨は本降りと言って良い。心地よい雨音と時折聞こえる演劇部員たちの発声が、今のこの静かな時の流れを実感させる。何事もない、平穏な日々。

彼は今しがたに旧館にたどり着き、いま階段を上っている。涼宮ハルヒが託けた原始的な温暖装置の贈与を受けに街まで下り、現在はその帰りである。彼がこちらの駅に着いた頃から、天候は雨に切り替わった。

そして今、閑散としている文芸部室のドアの前にたどり着いた。

ガチャリ、と古びた扉のノブが回される。

「あれ？　長門、おまえだけか」

彼はドアを開けると、廊下に置いた原始的な電気式温暖装置を重そうに両腕で持ち上げながら言った。雨に濡れて、こんなに重いものを持ってきたということは肉体的・精神的疲弊が大分高いと推察される。場合によっては、体調に一定の不具合を生じさせかねない。

大丈夫？

あたしは心の中で問いかけ、視線を本に戻した。

あたしの任務は『観察』である。よって、こちらからのアプローチは最小限にしなければならない。

「よっこいしょ、っと」

彼は私の後ろを通り、本棚の前に箱に入った温暖装置を置いた。立ち上がると、朝比奈みくるから借りていたピンクのマフラーを取りながら、

「ハルヒたちは？」
涼宮ハルヒ、朝比奈みくる、古泉一樹の三名は、今現在向かいの校舎2階にて写真機・撮影機による記録行為を行っている。
私はそう言おうとしたが、言葉を発することができない。そして、私は顔をかしげることで質問に答えた。
私のエモーショナル機能から生じるノイズが私に負荷をかけ、自己の行動を制限させている。行動だけではない。判断能力に与える影響も日々増加している。そのノイズにより、私は彼と同じ時間と空間を共有できるような言動を取らざるを得ない。そうしないと、私の精神プログラムに多大な負荷がかかるから。
彼は、私と反対側のパイプイスに座り、寒そうに両の手を擦っている。そして、思いついたように箱から電気式温暖装置を取り出し、アダプターを接続し、スイッチを入れた。焚き火にあたるかのように、彼は手をかざしている。
その様子を目の端で捉えながら、私は本を読む。いま、彼と同じ時間を共有する事で、精神的負荷から私は開放されていく。それとは逆にノイズが激しくなることが予想される。しかし、精神的負荷が高まると、それ以上にノイズが激しくなることも予想される。私には、そのノイズとインターフェイスとしてのプログラムとの間に生じている齟齬を処理することが必要。これ以上の精神的負荷に耐えられる保証はない。故に、私はそのノイズに従う行動を取らざるを得ない。
彼は元の場所に戻り、疲れた体を背もたれに投げ出した。そして目をつぶる。副交感神経が活発化している。彼の意識は徐々に薄くなっている。腕を枕代わりにし、薄目を開けつぶやくように言った。
「つかれたぁ……」
そして再び目をつぶり、眠りへと落ちる。
体温の低下を確認。室内の気温が上昇しても、このままでは彼の体調に不具合を及ぼす。

私はすぅーと席を立ち、カーディガンを脱いだ。そして、私はそれを彼の肩にかけて呟いた。

「風邪、ひくから……」

無意識の発言だった。

私は我に返った。内因的ノイズは私の意識的行動制御の中枢にまで影響している。

私はノイズに対する善後策を考えたが、すぐその思考はシャットダウンされた。ノイズによって。

それは、彼の寝顔をじぃっと見つめていることで高い振幅をみせる。エモーション機能が暴走している。切ない感情、閉塞感、焦燥感、独占欲、悪戯心など、色々な感情が溢れている。

私は……。

気が付くと何も見えない、真っ暗になっていた。それは目をつぶっているからだった。

一つだけ解るのは、私のくちびるに暖かいものが触れていることだった。私はゆっくりと目を開けて気付いた。私は彼に口づけをしていた。

キス。人間が最も愛おしい相手にする愛情表現。それを私は彼にしていた。観察対象に。本来なら、危機感をもつべきなのかもしれない。観察対象にこちらから積極的行動をとることは、許されていないから。

しかし、私の精神は高揚していた。

私はうれしかった。

私の心はノイズから生じる精神的負荷から多分に開放されていた。

しかし、事態は良くない。ここまでノイズによる侵食が進んでい

るとなると、”事件”が起きるまで、最早時間はない。
私は約3年6ヶ月前にあったことを思い出す。
あの日、今日より数ヶ月後の流体時間結合情報を有する彼と朝比奈みくるの異時間同位体を時間凍結した直後現れた、さらに後の時間の流体結合情報の彼と、より後の時空間流体情報の朝比奈みくるの異時間同位体のとの会話。
その時、私の未来は記された。私の暴走、私による世界改変。
それはもう時間の問題なのだと危惧感が高まる。すでに決まっている事象であるそれは不可避のこと。原因不明の事由により、私はその日以降の私と同期できないから、再改変が行われたのかも不明。いま、私にできることは脱出プログラムを作ること。彼のためにも。

私は涼宮ハルヒのいつも座るイスに着き、物質依存型パーソナルコンピュータを起動させた。そして、私は素早くキーボードを打ち、プログラムを開発する作業を始めた。この原始的装置の扱い方は先のコンピュータ研究会との対戦で把握している。造作もない。
ただし、涼宮ハルヒたちがこちらに向っているのを確認。私は急いでプログラムを作り上げた。世界改変の影響を受けないように、プログラム自体にもプロテクトをする。
最後のエンターキーを押す寸前、手が止まった。

本当にこれで良いのだろうか。

なぜ二ヵ月後の私は世界を改変したのか。誰が望んだわけでもない。暴走状態。ノイズの影響をうけていたが、それは私の意志だったはず。なのに、今私はそれと矛盾する行動をしている。

すでに決まっていることだから？
そうだとしても、情報統合思念体のインターフェイスがする行為ではないのかもしれない。理解しかねる矛盾行動。

……。
私は眠っている彼をみた。
「あなたに賭ける」
あのときと同じように。
あなたならきっと、正しい選択をしてくれると思うから。
カチッ。
私はエンターキーを打った。それと同時に
バンッ！
と扉が開き、涼宮ハルヒが入ってきた。
「たっだいまー！あら？」
彼女は部屋を見渡すと、彼を見て、次いで私を見つめ、にやりと笑った。
「めずらしいわね。有希が私のパソコンいじってるなんて」
涼宮ハルヒがそう言いながら部室に入ってくるのに続いて、朝比奈みくると古泉一樹が入ってきた。朝日奈みくるの精神的疲労が４０パーセント増量されている。いつものこと。気にすることではない。
たしかに私が自らこの机にある原始的な機械を操作するのは初めてになる。
「なんかおもしろいサイトでもあったの？」
涼宮ハルヒの質問。
別に。現代人が作った記述より、かつてのもしくは一部の教養ある人間が創作したものの方がユニークであり、おもしろい。
私はイスを空けた。そして、「メッセージを送っただけ」と今の状況を簡易に説明した。

ただし、何のため、誰にどうのようなメッセージを送ったかは伏せた。彼女もそれは聞かない。涼宮ハルヒは相手の触れるべきでないと考える箇所について立ち入る真似はしない。しかし、変な誤解をされるのも考えよう。そこだけが不安。

私はいつもの席に戻り、読書を再開した。

誰よりも早く古泉一樹が帰宅の意思を表明する。朝比奈みくる、涼宮ハルヒの両名が各々別離のあいさつを告げた。

涼宮ハルヒは彼に目を向け、ジッと彼を見ている。

「キョンの背中にあるの、有希のよね？」

そう。

「わざわざカーディガンなんか貸さなくても良かったのに」

「風邪をひくから」

「ふーん。……まぁ、いいわ」

彼女は口では冷たいことを言うが、本心は彼を心配している。

そして、私たちのことも。

彼女は文芸部室の鍵を閉める為に、職員室に鍵を取りに向った。部室には私と朝比奈みくるの二人だけ。朝比奈みくるは、私の事を気にしていて落ち着かないようだ。さっきから困った顔をしている。

その様子を察しながらも私は読書を続ける。

……。

沈黙。

彼女は取りあえず服を着替えることにしたようだ。服を脱ごうと手をかけたが、すぐにその手はとまった。彼がいることを思い出し、着替える事を躊躇している。

「大丈夫。起きない」

「で、でもぉ……」

朝比奈みくるはまだ困惑している。難儀。仕方がない。
私は本を閉じ、席を立った。そして、彼に近付き、手をかざした。
「あの、長門さん。キョンくんになにを？」
彼女は少し慌てた風に訊いてきた。
「肉体疲労から彼が目を覚ます可能性は１０パーセントにも満たない。しかし、それでもあなたは着替えを続行しようとしない。それは目を覚まさないという保証がないから」
「はぁ」
「だから、私がそれを保証する。彼が目を覚まさないようにする」
「ふぇ、えと、それはどういう……」
彼女が言い終わらないうちに実行。
「した。目を覚ます可能性は０，００１パーセント。着替えるならいま」
「あの、でも……」
私は彼女を見つめる。
「……。わかりました。ありがとうございます」
彼女は笑顔で礼を述べて、深々と頭を下げた。
「別に、いい」
彼女が着替えている間、私は帰宅の準備をする。朝比奈みくるは着替えながら、彼の寝顔をみて微笑んでいる。私はそれをジッと見つめていた。
高校生らしい日常的な場面。普段見せない後輩の寝顔を楽しむ先輩。いや、違う……。

そう思った瞬間、私の中でノイズが生じ始めた。
私の視線に気付いた朝比奈みくるは慌てて服の着替えを再開した。
私はかばんを提げ、部屋を出ようとする。後ろで朝比奈みくるが何か言おうとしている気配がするが、私は振り向く事もせずに部屋を出た。

すると、廊下の向こうから涼宮ハルヒがこちらに向って歩いてくるのが見えた。
「雨ひどいわね。傘はあるの？」
「ある。大丈夫」
「そう。風邪ひかないよう気をつけてね」
「大丈夫」
私はさっき朝比奈みくるが私に告げようとした言葉を言ってみる事にした。
「また明日」
涼宮ハルヒは少し驚いたように瞬きを二度した。だが、すぐにいつもの顔へと戻る。
「うん。また明日ね」
わたしは、どうして朝比奈みくるのような言葉を述べたのだろう。ノイズがそうさせた。しかし、何故彼女の言葉を？
校舎を歩きながら、私はさっきの光景を思い出した。女生徒が男子生徒を気にする、普通のシチュエーション。
そして、この後の涼宮ハルヒの行動を予測していた。彼女の思考や状況などを考慮すれば、どのような行動に出るかは予想可能。おそらく……。
しかし、私が自らの意思で彼女たちのような行動に出ることはない。私は一インターフェイスに過ぎないから。
さっきの一連の行為、移譲動作と言ってもいい、それらはノイズによるもの。私の意志ではない。情報統合思念体もさほど憂慮していない。
でも、もし、私がインターフェイスではなく、一人の女子生徒だったとしたら。一人の文芸部員だったとしたら。涼宮ハルヒの監視役ではなく、彼の監視役でもなくて、一人の人間として、彼に出逢えていたとしたら、このようになることもなかったのかもしれない。
もしも、私の願望をかなえることができたら……。

通用口を出て、頭上から落ちる冷たい雫が、ノイズにより揺さぶられる私の頬をつたう。

私は……本当は……。

私の望みは……。

～そして物語は『涼宮ハルヒの消失』へ～

## （後書き）

あとがきのようなもの

この度は僕の稚拙な文章を最後までお読みくださり、誠にありがとうございました。

姉妹作品のハルヒ視点のあとがきで「処女作品」と言ってしまいましたが、厳密に言うと、こちらが最初に書いたお話です。ですので、同様に謝罪したいと思います。文法的にも、内容的にも、表現的にも、素人感にさらに素人感を上塗りしたような雰囲気になっており、すみません。

さて、とうとう「消失」が映画化されますね。ずっとハルヒを読んできた者、消失長門に惚れた人には朗報中の朗報でしょう。僕にとっても最大の朗報です。

先にも書いたように、これは「消失」へとつながる話となっています。書いた後にそれが判明しました。ですので、皆様にとって、これが「消失」をより一層楽しめるものとなっていれば書いた僕としてはやはり最大の喜びです。

では、またお会いする日があれば、よろしくお願いします。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2390i/

---

【涼宮ハルヒ二次ＳＳ】「ある雨降る日のこと」～長門の話～

2010年12月31日02時38分発行